性的な舞踊としてのストリップの変容――「黄金時代」と 1985 年以後

武藤大祐（群馬県立女子大学）

第二次大戦後に生まれた日本のストリップは、その最初期から舞踊を不可欠な構成要素としてきたが、その舞踊としての特質はほとんど研究されていない。ストリップが性風俗としてのみ捉えられ、舞踊として認識されないとすれば、それは明らかな偏向といわざるを得ない。性風俗と舞踊の弁別は決して自明ではないからである。事実、秦豊吉の発案により 1947 年に新宿の帝都座五階劇場で上演された「額縁ショー」に代表される草創期から、ストリップは訓練を受けたダンサーや振付師たちによって担われてきた。そして他方、赤線や「トルコ風呂」などといった種々の性風俗産業との競合関係の中での変遷の歴史をも併せ持つのである。

橋本与志夫は、性的要素を含んだ芸能としてのストリップが「黄金時代」を迎えたのは 1950 年代前半と見ている。これ以後、ストリップにおいて舞踊の比重は長期的に低下の一途を辿った。1958 年に施行される売春防止法などとも密接に関わりながら、ストリップは性風俗として過激化し、実質的な買売春を行っていた時期さえある。しかし 1985 年の改正風営法施行によって露骨な性表現が禁じられると、存亡の危機に瀕したストリップ業界の内部から、他の性風俗とは異質な身体表現として再生させる動きが現れた。その結果、今日のストリップは再び独特の舞踊の上演へと変容している。

とはいえ、これを「黄金時代」への単純な回帰と考えることはできない。ストリップは 1960～80 年代の過激化を既に経験しており、さらにアダルトビデオやインターネットの普及によって女性の裸体の持つ社会的な意味も大きく異なっているからである。

「黄金時代」のストリップが、女性の裸体に対する男性の性的な眼差しに支えられていたために、乳房や性器を焦点化し、究極的には性行為の過激な上演にまで至る傾斜を潜在させていたとすれば、現在のストリップにそうした可能性はない。踊り子が自らプロデュースする演目の上演を具体的に検討すればわかるように、むしろ単なる交接としての性行為を必ずしもゴールとするのではない様々な表現、とりわけ脱衣や性的な身振りと舞踊の高度な統合によって、「性」は遊戯的にズラされ、ラディカルな多義性へと開かれているのである。

ここには 2010 年代から観客に女性が急増したこともおそらく関わっているが、ヘテロ男性を中心に培われてきた文化を乗っ取るかのようにしてセクシュアリティの流動化が起きている点は注目に値しよう。